

作家のうらおもて

田辺茂一 対談集

水上 勉

笹沢左保

丸谷才一

開高 健

長部日出雄

藤原審爾

吉行淳之介

井上ひさし

三浦朱門

北 杜夫

源氏鶏太

半村 良



田 辺 茂 一

作家，紀伊国屋書店社長 昭和
2年，紀伊国屋書店を創業し，書
店経営のかたわら『行動』を主宰
し『文芸都市』の出資者となる。
主な著書「わが町新宿」「すたこ
らさっさ(正・続)」「正体見たり」
「芯のない日日」「夜の市長」『轉
軻』他

作家のうらおもて

定価 980 円

昭和55年3月6日 第一刷

編 者 田 辺 茂 一

発行者 小 林 康 男

印刷 ㈱上野印刷所 製本 宮田製本所

発行所 ㈱行政通信社

東京都千代田区紀尾井町3-33

郵便番号 102 電話 265・0341

振替東京 2-114629

作家のうらおもて

田辺茂一対談集

行政通信社

作家のうらおもて 田辺茂一対談集 目次

ズバリ大穴

半村 良

5

おんなの地図

水上 勉

29

幽霊と怨念

源氏鶏太

55

医者の不養生

北 杜夫

79

馬上、厠上、枕上

開高 健

103

男のヤキモチ

笹沢左保

131

人生の尻ふき

藤原審爾

161

仏相、凶相

吉行淳之介

187

奇怪な戦争体験

丸谷才一

217

ハモニカ横丁

長部日出雄

239

親の呪い

三浦朱門

267

飲み屋の燗番

井上ひさし

293

対談をおえて

田辺茂一

315

ズバリ大穴

半村 良 田辺茂一

田辺 将来はどういう展開を……、大河小説ですか。 半村 ええ、タイガーは出てこないんですけど

『作家』といって叱られた

田辺 きょうのテーマはね、流行作家の内懷ってところかな……。

半村 それが気持ち悪いんですよ。(笑)

田辺 そういうのをね、やっぱり知りたいから。

半村 以前、田辺大先輩をですねえ、『作家』って言って怒られたことが一度あるんです。……その恐ろしいところをもってきて、(笑)『流行作家』なんて言われると、なんか、背中から手を回してお尻くすぐられてるような感じで……。ですから、田辺さんと対談なんていうことになるとは思わなかったです。

田辺 まあ、あんまり改まったってしょうがないけど、いまだいぶ脂が乗っておられるんで。月、何枚ぐらいですか。

半村 そうですね、ペースが七百枚ぐらいになっちゃってますね。

田辺 ああ、大変ですねえ。

半村 で、三カ月か四カ月に一回ぐらいずつ千枚越えちゃうんですよね。これではとてももたないものですから、単発を全部お断りしたら、今度は全部連載になっちゃって。でも、その方が楽かもわかんないな、と思っておりますけれども。

田辺 連載というのは、やっぱり覚悟してるから、やりいいですね。

半村 そうですね。

田辺 予定がね。心構えというか。

半村 水商売のころ、絵かきさんの若い人とか、詩人とか、若い人ばかり集めて、田辺さんが大デレゲーションを組んで、私のお店などにも何度か見えたことがあるんですけど。

田辺 はあ、それはぼくは全然記憶ないです。

半村 それはそうでしょう、あれだけ回ってれば。(笑)

田辺 悪いけど……。

半村 女性でさえ覚えてないのに。二度目に、「初めまして」という人ですから。

田辺 ウン……。あのね、関係しても、忘れちゃうんだ。

半村 そうでしょう。

田辺 ひどいんだ。

半村 二度目でも、気がつかなかったってんだから恐ろしい。(笑)

田辺 「アラ、前とおんなじことおっしゃってるッ」。(笑) いやんなっちゃう。

半村 話を戻しますとね。ぼくは、小説を書く人間としてはとっても変な経歴でして、作家になリたがったことがないんです。

田辺 そうなの。

半村 若いころ、同人誌をやったこともありせんしね。つまり、文学青年の時代が全然ないんですよ。三十歳の時に初めて小説を書いたのが、コンテストの応募だったものですからね。それが、入選しちゃったものですから、最初から賞金をいただきましてね。

それ以後も、まだ小説家になる気はなかったんですけど、『SFマガジン』が日本人作家を育てるということで、編集長が、ときどき書け書けと言ってくれるわけです。書きますと、多少の手直しをされたこともありますけど、雑誌に載りますね。そうすると原稿料をいただく。ですからいまだに、原稿料をいただかない原稿を書いてないんです。

田辺 私もね、文学青年じゃない、そういう作家的な修業をしないで初めから原稿料もらって。

半村 ああ、そうですね。

田辺 まあ、ぼくなんか随筆が多いんですけど。むだなね、書き溜めなんて、そんな馬鹿なことしたことない。(笑)

半村 なんとなく、後ろめたい……。まあ、あんまりないケースだそうですね。

田辺 だから、原稿の書きそこないを破って捨てるとか、ああいうことないんだ。もったいなくて。(笑)でも、やっぱり苦労した方がいいのかもわかんないですね。

半村 賞をもらう前に原稿を行李にいっぱいとか、よく話は聞きますけど、そういうことが全然ないんです。その分、なんか後ろめたい気はするんですけども……。

新人賞の穴ねらい

田辺 私なんかもね、まわりでは、作家になりそこねた、と思っっているらしいけど、作家になろうと思ったことはなかったですね。それで、なんとなく書いてて、自然にそうなってしまった。それで、あなたの場合は、初めから、そういう形の小説を書こう……まあ、そういう気持ちがありました。

から書いたんだろうけど、動機みたいなのはあるんですか。いままでの小説と少し違う感じで出たわけでしょう。

半村 ええ、水商売をやっている足を洗ったときに小説を初めて書きましたんですけど、その後、広告屋をやったんですよ。水商売のときもそうなんですけど、広告屋もなんとなくファッションみたいなものに敏感にならざるを得ない商売なんですよね。水商売の足を洗う一つのスプリングボードとして、一編だけ小説を書いたんです。

田辺 うむ……。

半村 つまり、それは、小説を一編、百枚ぐらい書き通せば、自分で自信が持てると思ったものですから、それで書いたわけなんです。ただ、書くといっても、やっぱり締め切りがあったり、掲載するあてがないとね。ただ書くというのはなかなかむづかしいんです。

それで、どこの雑誌社の応募作品にしようかなと思ってたら、その時は、『SFマガジン』が創刊された直後でして、一回目のコンテストが終わってたんです。読んでみたら、『オール讀物』の新人賞やなんかと比べるとわりと水準が……低いような気がしましたのでね。

田辺 どなたか選者がいたんですか。

半村 ええ、おりましたけど、そのころは選者の対策までは考えませんでした。それでこちら辺が薄いから、という感じがあって、その程度のことです……。

田辺 ああ、穴ですね。

半村 ええ。ガバツと書きちゃった。『オール讀物』の新人賞なんてのは、セミプロみたいな、水

準が非常に高いような気がしたものですからね。こんなところで書いてもつままないな、と思って。それに、SFというのは、読み始めると、どうしても書きたくなる時期があるんです。そのためにいまでもSFのファンの数とほとんど等しいぐらい同人誌で書く人数がいるんですよ。

ちょうど、ぼくはそのころ、たくさん読んでいてSFのファンといえば口あたりで、おれにもこういうアイディアがある、という状態だったんですね。それでSFを書いた……。

あいていた作家の椅子

田辺 SFが出てから十年ぐらいになりますか、もう？

半村 いや、もっとになります。ぼくがコンテストで、初めて書いたのが、三十何年ですから、もう二十年はたってますね。

田辺 ほか、不勉強で、あんまり読んでないんで、どうも……。

半村 ただ、最初のころのSFと、ものの考え方が最近全然違っておりましたね。

田辺 ああ、そう。

半村 ぼくは自分なりにたくさんの小説を好きで読んでんですが、その中でも特にミステリー中心に読んでますと、パターンがだんだんわかってくるんですよ。

ところが、SFにぶつかりますとね、これが全然わからない。どうやって終わるんだか、初めのほう読んだだけではね。全部読まないと結末がわかんないんで、これはおもしろいと思って、それで夢中になってたんです。

ただ比較的早くに、SFの手口のわからないおもしろさと、普通の小説の密度みたいなものをつなげて書いてみたいな、とは思ってたんです。それに、子供のときから伝奇小説好きでしたし、SFを入れた伝奇小説を書いたらいいなと思ってはいたんです。ところが、SF界が純粋性を尊んだものですから伝奇小説風なSFというのは、最初のうちはなかなか。つまり、ジャンルの壁を高くして外と隔離する傾向があったんですね。それで、書くチャンスが来たのが三十七歳のときです。それまでに、ある程度の構想もあったまっていたし、いろんな小説の材料もあったものですから……。で、世間を見回すと、伝奇小説の書き手がいないわけです。桃源社やなんかで復刻すると、ずいぶん売れてるんですよ。需要があるはずなのに供給が行われていない。なんか、プロの作家の椅子が一つあいてるな、っていう感じでね。

田辺 かなり先取りしたわけですね。

半村 ええ。それは、すいてるなという感じより、あいてるという、確信がありましたね。これをやりゃいいんだ、という。それで自分ではわりと確信を持って、当たる、と思って書きちゃった。

田辺 ご着眼の勝利ですね。

半村 水商売をやって、広告屋をやりましたから、二つ重なってるんです。マーケットとして読者を見るようなところが。

タイガーのいない大河小説

田辺 将来的にはどういう展開をしていこうと考えられるんですか。

半村 ぼくは、やっぱり伝奇小説はこの先も離れないつもりではいるんです。でも、自分で書き始めましてから、だんだんに思うようになったんですけど、どの先輩方を拝見しても、たくさん書いてらっしゃる時期というのが、大体十年ぐらい。あとは多少、高年性の、中高年性の書き方に変わる時期が必ず来るはずですから、そこまでは、まあ、体力が許す限りご注文があれば書こうと。ただし、それから先は、ちょっと作家らしく……。(笑)

気取るわけじゃないんですけど、マーケットやなんかのそういう考え方をはずしまして、前から書きたかったものを書きたいなと考えています。やはり歴史絡みの小説を。

歴史小説と、青春成長小説が重なったものには『宮本武蔵』やなんかがございますけど、ああいったものを書きたいなと思ってるんです。まあ、大衆小説というのは、大体が徳川時代の講釈から出てきたものでしょう。そうしますと、『太平記』ぐらいまでは舞台はさかのぼっているんです。ですから、信長や秀吉や家康をいまさらぼくが、いじったってどうにもしようがないんです。

ただ、これまでの大衆小説の中に、平安朝以前の古代というか、平城京のころが、舞台として入ってきていないものですから、何とか勉強して、ここを、歴史ものというかたいものじゃなく、やっぱり、現代と同じような青春のあるものとして書いてみたいと思います。そこには、本格的な大衆小説がまだ入っていませんのでね。ただ、これをやるのは大変なんです。古典をもう一度、全部こなしからでないといけないので。

田辺 大河小説ですね。

半村 ええ……^{タイガー}虎は出てこないんですけど。(笑) 会話とか文章とか、そういうものもある

程度開発していかないと……。こういうこと考えたきっかけは、ごく単純なことなんですけど、世田谷に住んでいた時、広告代理店の事務所が南平台にあったんです。

田辺 何の広告？

半村 何でもやりました。制作物が主でした。いまで言うところ、デザイン・ブティック……。

田辺 雑誌を出してたんですか。

半村 いえいえ、ポスターをつくったり、パンフレットをつくったりするデザインで、最後はそれをやってたんです。ちっちゃな会社ですけど、そこに毎日通ってたときに、ストライキがあったんですよ。それで、世田谷から歩かなきゃならなかったんです。

ちょうどそのときに、高速道路の建設中だったんです。つくりかけのどっかい柱がズラッと並んでましてね、あれ、さび止めの赤いペンキを塗りますわね。赤い、でっかい柱がそろそろ連なってるのを見てね、もしかしたら、昔、平城京をこしらえるときに、あの近所の子どもが、東大寺の門なんかができるのを、こんな気持ちで見たんじゃないかな、って思ったんですよ。それで、あの辺のことが書きたくなりましてね。

田辺 ウン……。

半村 で、平安朝以前の時代にさかのぼっても、戦国時代と同じように、いわゆるご存じの役者が素材としてたくさんいるわけです。ただ、大衆的に処理されていないので、歴史上の人物という感じでしか残ってませんのね。彼らを全部自分なりに……。

田辺 古本なんかは、ずいぶんお買いになるの？

半村 ええ、かなり集積してます。同級生に、古本屋で親子二代続いているものですから。

田辺 へえー、神田ですか？

半村 いえ、水天宮の方です。古い本屋さんですけれども。これに、テーマだけ言うと、大体サツと揃えてくれますんで、大変便利なんです。今のところは、まだ他の仕事をしてますから、集積中ですが、徐々に読んでいるんです。それでも三十七のときから始めましたから、もうそろそろ十年経ってしまっていますものですからね。今回、連載をたくさん引き受けたのも、それで年季あけにしよう。（笑）

それから、特に自分で必要だと思ってるのは、大和に住む必要を非常に感じてるんです。ぼくは東京の生まれで、東京の育ちですから、どこに寝ていても、赤羽って言ったら目つむってても指差せますけども、そういう方向感覚とか、距離感とかってのを、大和でも、どうしてもつかんでおきたいものですから。

離婚の「前科」が消える

田辺 話が別になって恐縮ですけど、東京もんてのは、「故郷に山河あり」なんていう詩やなんか読むと、なんか大和あたりの方が、もう一つ、人生がよけいにあるような気がするもんですね。

半村 そうですね。

田辺 帰る港があったり、おふくろがそこにいるような。

半村 そうなんですね。うらやましい感じです。

田辺 ちょっとうらやましいね。

半村 ほんとに、ぼくらより持ち物が一つ多いって感じがしますね。

田辺 ニュアンスがあるようなね。

半村 ぼくは本所で育ってますけども、いま本所へ行ったって、うっかりしてると、ここはどこだろうという感じです。昔は、電車通りがありまして、裏と表がはっきりしてましたけど、電車がなくなっちゃったから、全部裏通りに見えるんです。そこへもってきて、表通りは全部ビルになっちゃいましたしね。

田辺 いま世田谷でしょ？

半村 世田谷です。父親が八つのときに死んでましてね、ずっと母親と兄弟二人で過ごしてきたんです。その間に戦争があったり、戦災があったり、戦後の混乱期があったりしたものですから、そのたびに状況に対応して生きていかなきゃならないんで、盛り場にくっついちゃうことになるんですよ。

そうしますとね、同じ所に何年も住むということがないんです。転々と、ただ東京の中ということだけでしてね。ひどいときには、一年に四回も引っ越してますから。いま、住んだ順序を思い出そうと思っても、順序が入れかわって思い出せないくらいなんです。ですから、小説を書いて、多少実入りが良くなってきたときに、一番先にやっぱり、動かない土地、家が欲しかったです。

田辺 安定した……。

半村 ええ。で、やっと無理やり手に入れたものですからね、もう喜んで、本籍地も全部そこに動